

8. 転移性骨腫瘍の診断における骨シンチグラフィと MRI の比較

服部 英行 国又 肇

(関東中央病院・放)

悪性腫瘍の骨転移の診断は、まず骨シンチグラフィを行い、次の手段として、CT、MRI を施行するのが一般的である。しかし MRI は、1 回または 2 回の検査で脊椎全体の描出が可能であり、また近年 MRI の骨転移描出の鋭敏性が指摘されている。そこで、今回われわれは、脊椎転移の診断における骨シンチグラフィと MRI の有用性について比較検討した。

対象は、原発が確定されている悪性腫瘍患者で、骨シンチグラフィ、MRI 双方とも施行し、脊椎転移の確定診断がついている 20 症例である。

骨シンチグラフィで描出され MRI で描出されなかった転移巣が存在する症例はなかったが、逆は 3 例存在した。転移巣の描出は MRI のほうが鋭敏であった。しかし疑陽性例が多いと推測された。

9. 緊急検査として施行された肺血流シンチグラフィの検討

吉岡 宏美 藤井 博史 杉浦 弘明

橋本 順 久保 敦司 (慶應大・放)

肺血流シンチグラフィは、肺塞栓症を診断する感度の高い核医学検査である。肺塞栓症は生命の危機に瀕することも少なくないため、本検査は緊急検査としてもしばしば施行される。しかし、緊急検査として施行されると、定期検査の進行に影響を与えるなどの問題が生じる。最近 2 年間に、慶應大学病院放射線科で、緊急検査として施行された 78 検査の ^{99m}Tc -MAA 肺血流シンチグラフィの所見を検討しその有用性を評価した。緊急検査で肺血流異常所見を示し、肺血栓塞栓症の診断が下された症例は、78 検査中 31 症例 (39.7%) であった。外科系の診療科の術後の呼吸困難の精査や、内科などから依頼される血中酸素分圧の低下、深部静脈血栓症の合併などで、高頻度に異常所見が検出された。30 歳前後の女性、高齢者、術後の患者に多く認められた。比較的若い女性に多いのは、帝王切開術の術後に肺塞栓症をきたす症例があるためと考えられた。検査のうち、およそ 40% と高率に肺塞栓症が発見されたため、本検

査の緊急検査としての妥当性が確認された。

10. 抗リン脂質抗体症候群の肺換気・血流シンチグラフィの検討

杉浦 弘明 藤井 博史 吉岡 宏美

橋本 順 久保 敦司 (慶應大・放)

抗リン脂質抗体は主に SLE 患者に認められ、血栓症が多発することが報告されている。動脈血血液ガス検査や心電図所見などから肺塞栓症が疑われた膠原病患者について、抗リン脂質抗体が陽性か陰性かにより、肺換気・血流シンチグラフィの所見に相違があるかどうかを検討した。肺換気・血流シンチグラフィでの肺塞栓症の程度を明らかな肺塞栓症の所見が認められないもの (-)、片肺の一葉に限局しているもの (+)、広範に多発しているもの (++) の 3 群に分類して評価した。抗リン脂質抗体が陽性の群では、(+)-(++) の肺塞栓症の所見が確認できる症例の割合が 82% と抗体陰性の群の 23% より高値を示した。抗リン脂質抗体症候群の症例では、肺塞栓症の範囲が広範で、多発する症例が多いことが示された。

11. 糖尿病マウスにおける ^{125}I -BMIPP の体内分布

東 静香 大島 統男 菊池 善郎

神長 達郎 白井 辰夫 横川 徳造

古井 滋 安河内 浩 (帝京大・放)

^{125}I -BMIPP, 370 KBq を自然発症糖尿病マウス (N=11) と Control マウス (N=11) に投与し、各臓器の体内分布を測定し、心筋を中心に脂肪酸代謝を検討した。

1) 絶食下において DM マウスは心臓、肝臓、胃、消化管の取り込み (%I.D./g) が control マウスと比較して有意に低下した。2) 非絶食下において DM マウスは心臓、肝臓の取り込みが control マウスと比較して有意に低下した。3) 心臓、肝臓の取り込みは、絶食することにより DM と control との差が拡大した。

これらの結果より、絶食下、非絶食下ともに糖尿病マウス心筋において ^{125}I -BMIPP の集積が低下したことから、心筋の脂肪酸代謝異常が示唆された。